

The English Department Newsletter

関東学院大学 国際文化学部 英語文化学科ゼミナール連合通信 第7号 ● 2019年1月18日発行

「ゼミナール通信」冒頭挨拶

英語文化学科長 草山 学

CONTENTS

- ①挨拶
国際交流演習 ハワイ・サー
ビスラーニング報告
- ②ハワイ現地研修参加者イン
タビュー
- ③第67回シェイクスピア英語劇
オープンキャンパス 国際文
化カフェ
- ④そうだ、留学に行こう。
—留学経験学生座談会—
- ⑤教職の授業って何をする
の? —めざせ、英語教員!—
- ⑥就職活動体験談
- ⑦英語文化学科によろこ
- ⑧大学院生にインタビュー
卒論発表会/TOEIC-IP試験
Vista

「4」という数字は「死」を連想させることから不吉な数字とされ、特に日本人はこの数字が嫌いな人が多いと言われています。しかし、私はそれほどこの数字が嫌いではありません。というのも、この数字には何か特別な力があるように感じるからです。小学生の頃、漢数字の「一」「二」「三」の次がいきなり「四」に変化するのがなぜだろうと不思議に思ったことがありました。漢字だけでなくローマ数字もⅠ、Ⅱ、Ⅲの次がⅣと変化することに気づいたときには、幼いながらも、この数字には何か変化をもたらす力が宿っているのではないかと感じたほどでした。実際、「4」という数字は「完全」「安定」という変化をもたらす象徴とされています。例えば、椅子やテーブルは、たいていは4本脚で支えられていますが、それは3本よりも4本の方が安定するからです。また、「四季」「東西南北」「起承転結」や自然界を形成する「4大元素(火・水・土・風)」などのように、この世界に存在するあらゆるものを「4」で表すことには、この数字がモノゴトの完全性を象徴する数字であるからなのかもしれません。

さて、「4」という数字にこだわったのは、私たちの学部学科が「国際文化学部英語文化学科」に名称変更してから今年で4年が経過し、初の卒業生を送り出す完成年度を迎えることとなったからです。漢数字やローマ数字の表示法が4から激変するように、我々の学科も4年目に大きく変わったことが1つあります。それは「4名」の新任の専任教員を迎え盤石な体制を整えることができたことです。

学生の皆さんの中にも、大学4年目に大きな変化を経験した人が多いと思います。厳しい就職活動を経験して大きく考え方が変わった人もいるでしょう。勉強面では、自らの学びの集大成として卒業論文の作成にチャレンジした人もいたでしょう。私のゼミナールでも、今年も多くの学生が卒業論文の作成に「四苦八苦」しました。しかし、提出までたどり着いたのは「4名」でした。もちろん、この数字にこだわったわけではなく、これには私の指導力不足もあったのではないかと深く反省しております。提出に至らなかったにもかかわらず、「人生の中で一番勉強が楽しいと思えた」と述べてくれた学生の一言は今も私の心の支えになっています。

4年生が中心となって作成されたこのニューズレターも誇るべき4年間の集大成の一つです。4年目の完成年度を迎えた英語文化学科初の卒業生が、ここでの学びを糧に「幸せ(4合わせ)」な人生を歩んでくれることを心から願っております。



最後まで諦めずに卒業論文に挑んだゼミ生です!

国際交流演習 ハワイ・サービスラーニング報告

2018年9月3日～9月11日
アメリカ合衆国ハワイ州

今年度の国際交流演習Ⅱが、2018年9月3日から9月11日までの日程で、ハワイ・ホノルル市内のカピオラニ・コミュニティ・カレッジ(KCC)を拠点に行われました。研修に参加した10人の学生はそれぞれ独自の計画に従って活動し、現地ならではの貴重な経験を通して、様々なことを学ぶことができたようです。

11月26日に行われた報告会に参加し、各参加者の活動報告を聞いたのですが、クアニロコという神聖な場所について調べたうえで発表したり、ボランティアで障がいのある方に算数やテニスを教えたり、Fish Pondという養魚池の環境保全の手伝ったり、ハワイの最高裁判所で模擬裁判を英語で行ったり、老人ホームを訪問して習字体験を行ったりと、その活動は実に盛りだくさんで、とても充実した研修だったことが伝わりました。

報告会の後で、実際に現地研修に参加した学生にインタビューを行いました。

(次のページにつづく)



研修最終日にKCCで修了証を手に記念撮影

ハワイ現地研修の参加者にインタビュー

Q. なぜこの活動に参加してみようと思ったのですか？

A. 4年生 松木：私は以前から海外の文化を勉強してみたいという希望を持っていました。それにはやはり、現地に行くことが一番だとも思っていました。現地だからこそ学べるものがたくさんあるはずですよ。

Q. この活動を通して自分自身が変わったことや感じたことはありますか？

A. 2年生 金沢：もっと色々な国の文化を学ぶべきだと痛感しました。そのためには自国である日本のことを学び、知識を増やして、交流する相手の人たちに詳しく説明できるくらいにならなければならないと思いました。

1年生 佐久間：グローバルな視野をもつことの大切さを感じました。歴史や言語、文化などの様々な視点からもっと色々なことを頑張りたいと思います。

Q. 最も印象に残った活動は何でしたか？

A. 3年生 井上：真珠湾を見学したことです。今までは日本側の視点からしか見ていなかったもので、アメリカ側の視点から見られたことが印象に残りました。当時の様々な国の人たちの立場になって考えてみると、真珠湾攻撃は行うべきだったのか、行わない方が良かったのか、正直なところ複雑な気持ちになりました。

Q. 何か困ったことや大変だったことはありましたか？

A. 2年生 口田：コンドミニアムで生活したので、最初のうちは自炊で苦労しました。スーパーも遠くて食料を集めるのが大変でした。

1年生 菊島：物価が高かったですね。またサービスを受けたらチップを渡すという習慣は日本ではほとんどないので、それも戸惑ったことのひとつでした。

Q. 報告会を終えて、活動全体の感想をきかせてください

3年生 坂梨：とても貴重な体験ができて有意義でした。この研修に参加しなければ、自分では行けなかった場所もたくさんありました。今回参加して本当に良かったです。

皆さん、ご協力ありがとうございました。最後に、我々もよく耳にするハワイの言葉“ALOHA”について触れたいと思います。この言葉にはちゃんとした意味があります。一説によると“ALO”と“HA”で分けることができ、前者は「共有する」、後者は「息」という意味なのだそうです。二つを合わせると「息を共有する」となり、ここから転じて様々な挨拶としても用いられるのだとか。「こんにちは」「いらっしゃいませ」「さようなら」「ごきげんよう」だけではなく、「愛しています」などの意味にも使われるというのですから面白いですね。それではみなさん、ALOHA!

(英語文化学科4年 鈴木 将道)



ホノルル市内の老人ホームにて



イオラニ宮殿の王座室



カメハメハ大王像



ビーチにて

2019年度の「国際交流演習」は、今回紹介したハワイ現地研修に加えて、English Campが企画されています。ハワイ現地研修の説明会は1月9日に、参加者の募集は1月中に行われる予定となっています。一方、English Campは国内で2泊3日の英語漬けの研修を行うというプログラムで、気軽に参加できて英語力も磨けると参加者に好評です。こちらの募集開始は4月を予定しています。詳細については文庫キャンパス内の掲示板に掲載しますので、参加を検討中の皆さんはお見逃しなく！

第67回シェイクスピア英語劇『マクベス』(Macbeth)

毎年、関東学院生によって上演されているシェイクスピア英語劇が、今年も開催されました。今回のお話は四大悲劇の一つ『マクベス』。そして今年は、マクベス夫人を演じる早坂愛華さん(社会学部1年)と、音響スタッフの青木舞弥乃さん(社会学部1年)にインタビューさせて頂くことができました。



マクベス夫人を熱演する早坂さん

—マクベスに出てくるキャラクターの中でも、マクベス夫人は非常に癖の強い、悲劇的要素の多いキャラクターだと思います。かなり演じるのは難しかったのではないですか？

早坂：かなり苦労しました。今まで演劇の経験はあったのですが、純粋な女の子の役しか演じたことがなくて。何度練習しても、「弱い、弱い」とか、言われ続けてましたね。慇懃無礼さを出して欲しいって言われた時とかはかなり困りました(笑)。

青木：でも普段との変わりようはすごかったよね(笑)。最初愛華を見た時との印象とは全然違ったかな(笑)。

—確かに(笑) 青木さんは、音響スタッフの経験は今回が初めてとお聞きしましたが、どんなところに苦労されましたか？

青木：春はずっと音探して、部室にあるCDをひたすら何時間もこもって聞いていました。リクエストはあるんですけど、音って抽象的じゃないですか。だから難しかったですね。「盛大なファンファーレを探して欲しい」とか。ラッパの音をひたすら聞いてた気がします(笑)。

—それは大変ですね。では最後に見所を教えてください

早坂・青木：私たちがマクベスを通して伝えたいのは「悲劇は繰り返される」ということ。

それをどのように表現しているのか、ぜひ見届けていただきたいです。

当日の公演は、役者から裏方スタッフまで、学生だけで構成されているとは到底考えられない完成度の素晴らしい舞台でした。来年の公演も見逃せません。

(英語文化学科4年 藤巻 燎汰)



インタビューに答える早坂さん(左)と青木さん(右)

オープンキャンパス 国際文化カフェ

8月10日・11日の2日間、文庫キャンパスでオープンキャンパスが開かれました。英語文化学科では10日に松村先生、11日に草山先生がそれぞれイギリス文学と英語学に関する模擬講義を開講、両日の午後には留学に行った学生が体験談を語る「私の留学体験記」という企画も行われました。また、今年も比較文化学科と共同で「国際文化カフェ」を開店しました。これは受験希望者や保護者の方に無料で飲み物とお菓子を提供し、カジュアルな雰囲気の中で、現役学生に気軽に質問や相談をしてもらおうというコーナーです。現役学生と直接関わり、学生の率直な意見や見方を進路判断のリソースの一つとして提供することが目的のひとつです。

私自身としては、受験生にはキャンパスに足を運んで、大学の雰囲気や学生の活気を見てほしいと思いがありました。大学は高校よりも建物も大きく、設備も充実しているので、華やかな部分に目が行きがちです。しかし、それ以上に目では見えないものに価値がある場所であり、またそのことを学ぶ場でもあります。そういった部分に目を向けてもらうこと、またその手助けすることが、ある意味で私たちの役割だったのではないかなと感じています。

(英語文化学科3年 小林 尚也)



そうだ、留学へ行こう。 — 留学経験学生座談会 —

本学の留学制度を利用して海外で学んだ3人の学生に、ご自身の留学体験についてお話をうかがいました。

今回の誌上座談会にお招きしたのは皆さん三年生で、アメリカのリンフィールド大学に留学した小池一真さんと大原梨乃さん、そしてカナダのサスカチュワン大学で学んだ増田純平さんの三人です。

Q. 留学へ行こうと思ったきっかけは何ですか？

小池：高校の時に2週間アメリカで過ごして、話したいことが全然話せなかった
ので「絶対リベンジしてやる！」という気持ちがありました。つまり、大
学に入る前から留学に行くつもりでした。

大原：高校生のころ、学校のプログラムで初めて海外に行きました。その時は初
めてで、右も左も分かりませんでした。これをきっかけに大学入
学後は留学をして学びたいと思いました。また海外をもっと知りたいと興
味が湧きました。

増田：自分が今までにできなかった経験ができると思いました。また母親が海外
で二年ほど生活したという話を聞き、海外への好奇心が芽生えたのと、生
の英語に触れてみたかったこともあります。



ボーリングを楽しむ小池さん

Q. 留学中一番印象に残ったことは何ですか？

小池：現地の学生のノリの良さです！良くも悪くもアメリカの学生は気持ちが表
に出やすく、何事にも積極的でした。自分にはそれがすごく合っていて
楽しめました。

大原：正しくても間違っている自分の意見をみんなの前で発表して共有するこ
ろです。それに対してまた誰かが意見を言って、どんどん議論が深まり、
しかも誰の意見も無駄にならないところがとても印象深いです。

増田：誰もが皆フレンドリーで分け隔てなく接してくれることです。他にも、日
本ではLGBTのイメージがあまりポジティブではないことがありますが、
海外では全く考え方が違うことです。



クリスマスを堪能する大原さん

Q. 留学へ行くか悩んでいる人へ一言お願いします！

小池：悩んでいるなら行ったほうが良いと思います。留学で何を学べるかはその
人次第だと思いますが、全く異なる文化や人に触れることは今後の人生で
必ず役に立つと思います。

大原：悩んでいるなら、勇気を出して一歩踏み出してほしいです！きっとその一
歩を踏み出したことは自分の自信につながるでしょう。もちろん言語は学
びますが、それ以上に多くの人との出会いや経験が人生の最高の宝物にな
ります。

増田：留学に行くことで自分の価値観や考え方が学べ、日本では味わえない経験
ができます。学生である今でしかできないことの一つだと思います。



増田さんは国際的なクラスメイトと

みなさんが改めて強調していたのは「留学は貴重な経験になる」ということです。私自身もある先生に「留学に行かないで後悔する人はいるが行って後悔した人はいない」と言われたことを思い出しました。留学に行くべきか悩んでいる方はもちろん、考えていなかった方にもぜひおすすめしたいと思います！

(英語文化学科4年 庄林 和樹)

教職の授業って何をするの？ —めざせ、英語教員！—

今年度教育実習を体験し、教職の免許を取得予定の2人の4年次生に教壇に立った経験についてインタビューしました。

教職課程ではどのようなことを学ぶのでしょうか。河門前貴信さんにインタビューしてみました。

僕が個人的に印象に残っている授業は、「特別活動の理論と実践」「教職ゼミナール」「教育相談」「英語科教育法」です。簡単に説明すると、まず「英語科教育法」では、英語の授業を行う上での進め方やポイントを学びました。実際に自分で模擬授業をやったり、他の学生の模擬授業を参観したりして自分の知識を増やしていきました。「教職ゼミナール」では、教育現場に関連した気



なるニュースをグループで分担しながら発表しました。自分から動いて積極的に学ぶことが楽しかったです。「教育相談」では、カウンセリングについて学べたのが有意義でした。そして最後に、僕が一番面白かったと思う授業が「特別活動の理論と実践」です。どんな活動したら生徒たちの仲が深まるのか。それを学ぶために、実際に体育館に行って体を動かしたり、担任になったつもりで自己紹介をしたり、様々な方法を身をもって体験できたのが、とても楽しかったです。僕は教職課程を履修したことで、教職の仲間ができて、大学生活をより楽しむことができました。

一大イベントである教育実習ではどのような体験をするのでしょうか。福王寿和さんにインタビューしてみました。

実習先では中学三年生を担当しました。一日の流れとしては、まず、朝学校に登校したら出勤簿にハンコを押して、空き時間に授業の準備をしたり、先生のお話を聞いたりしました。それから授業の実習を行い、生徒と一緒に給食を食べて、掃除をして、部活を参観して、授業案を先生に確認してもらって、という毎日でした。僕は19時くらいに帰りましたが、帰宅したあとも授業の準備を行ったりしていました。一番苦労したことは睡眠時間の管理です。教案づくりなどを後まわしにすると、睡眠時間を削らざるをえなくなるからです。ちなみに平均睡眠時間は4～5時間でしたが、気合で乗り切りました。辛いことや厳しいこともありましたが、それ以上に楽しいことがたくさんありました。もう一度実習をやりたいくらいです。授業中の生徒たちの表情や楽しそうな姿、特に「あっ！」と何かに気づいたことを素直に顔に出したり、普段しゃべらない生徒が手を挙げてくれたときには、とても嬉しくてやりがいを感じました。実習前は教壇に立つという実感がありませんでしたが、行ってみると、この仕事の面白さがよく分かりました。実際に体験して「生徒ともっと深く関わってみたい」という気持ちが湧いてきました。本当にこのまま卒業まで見守りたくくなりましたね。また、実習前は英語力や板書に自信が持てずに不安でしたが、実際に行ってみると自分の得意なことでカバーできることにも気がきました。その点でもいい経験となりました。



最後に、教師の魅力とは何でしょうか。吉田広毅先生からメッセージをいただきました。

英語文化学科の皆さんは、なぜ大学に進んで英語や英語圏の文化を学びたいと考えるようになったのですか。その進路選択には少なからず、学校や身近な先生の影響があったのではないかと思います。こうした、生徒の「学びたいという気持ち」、「学ぼうとする力」を支え、育むのが学校教員の役割だと私は考えています。国際調査「TALIS 2013」によれば、働きがいを感じていると回答した教員は85.1%にのびります。教師が好きなことを学び続け、そこでの発見に喜びを見出し、イキイキと生徒に伝えることが生徒の学ぼうとする態度をつくります。「英語を学ぶのが楽しい!」、「英語で世界中の人と話したい!」という生徒を支え、増やしていきませんか。
(英語文化学科4年 石田 礼奈)

就職活動体験談

今年は4名の4年次生にそれぞれの就職活動についてインタビューを行いました。

株式会社アマイに内定…丸山翼さん



私は、高校生の頃から食べ物に関わる仕事をしたいと思っていました。中でも、自分の好きなお肉に関わる仕事につければという希望がありました。ただ、就職活動を始めた当初は、業種を絞らずに様々な企業の説明会に行き、面接を受けました。その結果、面接に慣れ、複数社から内定をいただくことができました。また、異なる業種の選考を受けたことで、自分がやりたいことの再確認もできました。最終的に、高校生の時から興味を持っていたお肉を国内外の産地から仕入れ、営業する仕事を選びました。

就職活動はいきなり始まるので、周りの友達の様子が気になることもあると思いますが、焦ることなく自分のペースで頑張ってください。最初はやりたい職業がなくても、自分が少しでも興味をもった説明会に参加し続けることで、やりたい職業が自ずと見つかるはずです。

ANA エアポートサービスに内定…屋我和也さん



沖縄に住む祖父母を訪ねるために、幼いころから飛行機に何度も乗るうちに飛行機が好きになり、将来は、飛行機に関わる仕事に就きたいと思っていました。

3年生の秋に参加したかった航空会社のインターンシップは応募者が多く、抽選から外れてしまい、参加できませんでしたが、秋から冬にかけて開催された会社説明会には何度も足を運びました。空港スタッフの生の声を聞いたり、航空業界全般についての話を人事担当者から聞いたりして、選考に向け準備していきました。

航空業界は主に5月にエントリーシートを提出し、学力試験を経て、6月以降に面接が始まりますが、私は6月の前に何度か他業界の企業の面接を受けて、緊張しないように対策を講じました。実際の面接では笑顔を忘れずに、はきはきとしゃべることを心がけました。自分自身の言葉で、気持ちを込めて発言すれば、きっと面接官に響くと思います。就職活動で悔いを残さぬよう、精一杯頑張ってください。

JAL に内定…石山里紗さん



私は「人」にしかできない仕事がしたいという希望を持って就職活動をしました。また、空港で働くことは小さいころからの夢でもありました。就職活動を振り返ると、スケジュール管理や自己分析など事前準備が大切だったと強く感じます。私は部活動をしてきたため、他の学生よりも時間がないことはわかっていました。ただ、やはり周りの選考が始まっていくと焦りを感じることもありました。ON / OFF の切り替えをするためにも、スケジュール管理は特に重要だと思います。

選考前は気になる企業のホームページや資料に目を通し、説明会に何度も足を運んで知識や情報を増やしました。また、自己分析をすることが面接対策になっていたと感じます。自分に割いた時間が自信になり、面接も会話だと思って毎回の選考を楽しみながら臨むことができました。効果的なアピールを行うためには、自分の強みや経験をこの企業で生かしたい、将来に繋げたいという強い気持ちを伝えることが大切です。何気ない出来事が就職活動の材料になることもあるので、気になったことをメモしておくことをお勧めします！準備をしっかりと整えて、頑張ってください！

ワイジェイカード株式会社に内定…福岡勇人さん



僕が就職活動を本格的に始めたのは大学3年の1月からでした。やりたいことが無かったので、まず初めに自己分析と他己分析を行い、徐々に自分のやりたいことを明確にしていきました。その中で僕は人々のライフスタイルには欠かせない“決済”というものに興味を持ちました。そして、将来性のあるクレジットカード会社を軸に就職活動をしていこうと決めました。やりたいことが見つかったからの活動はとても楽しかったです。説明会や選考で出会う人たちには様々な志望理由や考え方があり、物事の言い回しも多様で、勉強になることが沢山ありました。時にはそういった人たちと連絡先を交換して、情報の共有を行ったり、励まし合ったりして就職活動を行っていました。

就職活動のやり方で何が正解かなんて、正直なところよく分かりません。ただ、自分から就職活動の楽しみを見つけようと意識してみると、無理せず、考えすぎずに行えるのかなと思います。また、就職活動は苦しいけれどよい思い出にもなります。力み過ぎず、自分のペースで頑張ってみてください。

(英語文化学科4年 室岡 篤史・高瀬 元貴)

英語文化学科ようこそ

2018年度に新たに着任された4人の先生方からメッセージをいただきました。

入江 識元 先生



入江ゼミはアメリカ文学・文化と社会を広く研究するゼミです。アメリカ文学に代表される文化やアメリカの歴史、政治問題や社会問題について、グループ間でテーマを設定し、ゼミメンバーの調査結果を発表し合いながら深く考察します。扱う題材はアメリカ研究ですが、どのような課題でも、それを実社会での課題解決に応用できる能力を身につけることが、このゼミの最大の目標です。2018年は「U.S.A.」が流行りました。「どっちかの夜は昼間」というおもしろい歌詞もありましたが、「アメリカ!」の連呼やアメリカン・ドリーム、成功の夢を想起させる語句から、一般的な日本人のなかにあるアメリカのイメージがわかります。アメリカという国は、なじみ深いけれども実はあまり理解されていない国かもしれません。ですから皆さんが常識と考えていることも「えっ? そうだったの?」と驚くことも多くあると思います。ゼミのキーワードは3C (Culture, Communication, Commitment)です。これは、教養 (culture)あるコミュニケーション (communication)をとりながらゼミと仲間コミット (commitment)することです。ゼミの中心はグループワークで、メンバーが中心となってゼミを運営します。アメリカに関するテーマをグループで設定し、話し合いとプレゼンの繰り返しから、自分の考えを自分の言葉で表現することを学びます。これが最終的には就活の基礎になります。研究成果の発表は合宿での発表会も含めて、グループ対抗のプレゼン形式で、採点もグループ相互で行うことを想定しています。

松村 聡子 先生



こんにちは。来年度からゼミナールを担当する松村です。イギリスの18世紀から19世紀にかけての小説を専門にしています。イギリスの小説というと、「やたらと長い!」「展開が遅い!」「筋にあまり関係なさそうな描写が多い!」「登場人物がジョージやチャールズやメアリだらけで訳が分からない!」などの印象を持っている人がいないでしょうか?でもじっくり読みこんでいくと、様々な文化や歴史が織り込まれていてとても興味深いですし、英語特有の表現に気づかされることもあって面白いですよ。また、時代や住んでいる地域が違って、人間の喜怒哀楽や人生の中で向き合う悩みや問題には普遍的なところがあるんだなと気づかされるはずです。ゼミナールではゼミ生たちとこうした文化・歴史・英語表現に加えて、物語の語り方や登場人物の心情など、いろいろな点から議論していきます。そうすることで、多様な考え方、複眼的なものを見方を培っていきたいと思います。それらは、学生の皆さんが今後厳しい社会で生き抜いていくために必要な力となると信じています。ゼミナールは教員が一方通行で学生に何か知識を伝える、というものではありません。みんなで議論しあい、学びあって作り上げていくものです。一緒に知の刺激的な世界を楽しんでいきましょう!

村岡 美奈 先生



4月に国際文化学部英語文化学科の専任講師に着任いたしました村岡美奈です。長い歴史と伝統を持つ関東学院大学で、教育に携われることを大変嬉しく思っています。担当する科目は主にアメリカの文化系科目です。私の専門はアメリカのユダヤ史で、主に20世紀転換期から20世紀半ばまでのアメリカ・ユダヤ社会について研究をしています。日本ではあまり盛んな専門ではないため、アメリカの大学院で勉強をしました。皆さんの知的好奇心を刺激し、楽しい授業を提供できるよう精進して参りたいと思います。また、皆さんが気軽に大学生活や進路について相談できるような身近な存在になりたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

角田 麻里 先生



関東学院大学に入りもうすでに半年以上たちました。私はこの大学に入るまでは、他の大学で一般教養の英語を教えました。専門は社会言語学なので、いつかそれに関連するものそして、私の海外経験が生かせる職業につきたいと思っていました。なので、専門科目を教えることができると思い楽しみにしていました。新しいことばかりで、いろいろと忙しくしていましたが、今は少し慣れて、研究室に遊びに来てくれる学生とやり取りしたりすることが多く、学生と先生との距離が近くて、とてもいい環境だと思います。これからの目標ですが、皆がもっと私の専門分野に興味を持ってくれる授業を心掛けたいと思います。これからもよろしくお願いたします!

大学院生にインタビュー

今年度から文学研究科 英語英米文学専攻 博士前期課程 1年に在籍中の南野奈緒さんにインタビューしました。

Q. 大学院に行こうと思った動機は何ですか？

2年生の時に草山先生のゼミを見学して、先輩の発表を見て、言語学って面白そうだな、もっと深く知りたいなと思い始めました。3年生になってからは言語学系の授業にできるだけ参加しました。就職活動のシーズンが近づくとつれて、就職をするよりもっと知識を深めたいと思い、進学を決意しました。

Q. 大学生活はどのように過ごしましたか？

部活やサークル等には所属していませんでしたので、1、2年生の間はただ授業をこなしていました。3年生でゼミが始まってからは活動に積極的に参加するようになり、やっと大学生らしい生活を送ることができたと思います。ゼミの授業では主に言語学、特に草山先生の専門である認知言語学を学びました。ゼミでは、勉強以外のイベントもたくさんあったので、3、4年生の間はほんとうに楽しかったです。



Q. 学部生へのメッセージ

大学1、2年生のうちはキャンパスライフを、大学そのものを楽しんでください。3、4年生になれば、自分の学びたいことがはっきりしてくると思います。自分の学びたいこと、身につけたい知識などをとことん追究してください。大学院への進学を考えている人たちは、知識を身につけるだけではなく、なんでこうなるのだろう？といった疑問をもつ癖をつけると役に立つと思います。大学院というのは、そんな疑問を自分なりに解決することが求められるところです。疑問を持つ心を忘れずに進学を目指してください。

(英語文化学科4年 高瀬 元貴)

2018年度 英語文化学科 卒業論文発表会

今年度も英語文化学科に提出された卒業論文の発表会を以下の日程で開催します。

日時：2019年2月7日(木) 13時30分から

場所：K-123教室(予定)

※終了後に懇親会を予定しています。

TOEIC-IP テスト 実施のお知らせ

英語文化学科生対象とした TOEIC-IP テストを今年も実施します。

日時：2019年2月7日(木) 9時20分から

場所：K-310、311教室(予定)

※受験費用：無料(2・3年生対象)

英語文化学科ゼミナール連合会

Vista No.7

▼ゼミナール通信第7号をお届けします。今号より私たち英語文化学科の学生が英米文学科の先輩方から編集と発行を引き継ぎました。新たなスタートとなる今回も、国際交流演習の報告からシェイクスピア劇、オープンキャンパスのイベントまで盛りだくさんの記事を揃えることができました。▼今回意識したのは、在学生の皆さんに参考となる紙面づくりです。定番の就職活動の体験記に留まらず、教職課程で参加した教育実習の体験記や現役の大学院生の方にもインタビューを行っています。将来を考える際に参考になるように質問も絞ってまとめました。▼もう一つの目玉は新任の先生方の紹介です。すでに授業で顔馴染みとなった先生はもちろん、まだ知らない先生の意外な一面が拝見できる記事や写真になっていると思います。先生の研究分野なども興味深い内容です。▼この Vista も少しリニューアルを図り、日本語と英語のダブルテキストで掲載しています。英訳も委員の1人が行なっていますので、ぜひ英文でも読んでみてください。▼最後に発行にあたりご指導、ご協力いただいた安藤先生、児玉先生、ヒース先生にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。

▼ We're pleased to present the seventh edition of The English Department Newsletter. We've taken over the editing and publishing from our seniors in the Department of English Literature, so this edition represents a new start. We've collected together a large number of articles on topics such as our Fieldwork for International Exchange, our Shakespeare play, and our Open Campus events. ▼ We've focused on content that will be a useful reference for current students. As well as a report on students' experiences of finding jobs, we've included interviews with students who are training as teachers and an interview with a graduate student. We focused our interview questions with a view to making the content useful to students as they think about their futures. ▼ Another feature is an introduction to our new teachers. Our new teachers have already become familiar faces in class, but their comments and photos reveal aspects of them that may surprise you. Their areas of research are also fascinating. ▼ For this edition, we've updated the Vista column by writing it in Japanese and English. We hope you'll read it in both languages. The Japanese-to-English translation was done by a member of our committee. ▼ Finally, we'd like to thank Dr. Ando, Mr. Kodama, and Mr. Heath for the help and advice they gave us as we prepared to publish this edition.

(英語文化学科4年 小林 咲・Hoang Trong Lan)

The English Department Newsletter Vol.7 (英語文化学科ゼミナール通信第7号) 2019年1月18日発行

編集：関東学院大学 国際文化学部 英語文化学科

編集協力：関東学院大学 国際文化学部 英語文化学科ゼミナール連合会

〒236-8502 横浜市金沢区釜利谷 3-22-1 TEL. 045(786)7179 URL : <http://www.univ.kanto-gakuin.ac.jp>

印刷所：株式会社なまためプリント 〒231-0006 横浜市中区南仲通 4-43 馬車道大津ビル TEL. 045(641)8080